

ゝ 自宅にて 〵

(カタカタカタ・・・) ノートPCのキーボードを叩く音がする。三沢はAM3:00をさそうとしているデジタル時計を横に、なにかの資料を作成していた。

「ん・・・？」

ねむたい目をこすりながら、夏美がベッドでふと目を覚ました。

「・・・・あらあら、ロマンスのかけらもないこと。」

と、あきれ顔でボソツとつぶやいた。

(ギッ) イスがきしんで三沢が振り向く。

「ん？ ああ、わるい、起こしてしまったか。」

すまなさそうに夏美のほうを見る。

「どうしてもやっておきたいことがあってね。」

また机のほうへ向きなおしたかと思うと、さっそくキーを叩きはじめる。

夏美はその姿をじっと見ていた。

「・・・・(ふーん、いい顔してるじゃない)」

「ん？ なにか言ったか？」

「べつにいい。じゃ、おやすみ。」

とシートにもぐりこんだ。

「ん。」

簡単に挨拶した三沢であったが、意識は作業のほうに向いていたようだ。

「各章ごとに話しは違ったがいくつかはつながりで書かれていた。兵法のすごさはその連携するところにあるんだ！」

三沢はなにかにとり憑かれたかのごとく資料を作りつづけるのだった。

朝になり、会社に到着した三沢は、さっそくタペ作成した資料のことを実行しようとしていた。

『兵は神速を貴ぶ』というもんな、早速行動開始だっ。」

駆け足気味に開発室へ向かい、スタッフへの資料を用意した。

「これで・・・・よし、っと。」

最後の座席へ資料を置き、ふうっと一息をついた。そこへスタッフたちがぞろぞろとやってくる。

城之内が挨拶をする。

「あ、係長、おはようございます。」(「いーまーす」、「ちーす」、「おっはようおー♪」というのも聞こえる)

「ああ、おはよう。進捗具合はどうだい？」

と、どこにでもあるような会話ではじめた。

「ええ、まあ、順調ですけど・・・・係長、先週もおなじようなこと言ってませんでした？」

城之内が聞き返してきた。三沢は少しあわてた素振りを見せながら

「え？ああ、いや、そうだったかな？（ひと呼吸おいて）ちょっと早いけど、次のプロジェクトが決まったんでね。前もって話しておこうかと思って。」

三沢は資料を片手に説明をはじめた・・・

―少し戻って先週末の話―

“先ずは情報収集につとめよ”

三沢は兵法書に情報戦が重要だと書いてあったことを思い出し、このようなメモ書きを手帳に記した。

「よし、先ずは現場の状況を把握することからはじめるか。」

パタンと手帳を閉じ、ウンとうなずいたかと思うと、さっそくヒアリングを開始した。

「あれから順調なようだけど、なにか問題はないか？ささいなことでもいいから話してみてくれ。」

みなが顔を見合わせ、現場は少しざわついた。スケジュール的にも成果的にも、これといった問題はないはずなのになぜこのようなことを聞かれるのだろうといった感じた。

「そういえば・・・」

ひとりが口を開いた。

「そういえば、エリカはどうしてます？この前までよくペアやってたから、すごく気になっちゃって・・・」

そういえば、彼女はよくペアになっていた気がする。よく気があったのか、楽しそうにプログラミングしていたように思う。思えば、XPという開発手法を用いようとしたとき、真っ先に“ペアプロ”ってなんですか？」と、興味深そうに質問してきたのも彼女だった。

「XPじゃなくなっちゃからは、なんていうか・・・楽しくないっていうか・・・仕事でこんなこと言っちゃダメなんですけど・・・」

そんなことを話し出した。

「この前のXPでも十分に成果が出ていたのに、どうして変わったんですか？」

別のものが質問してきた。ここにすかさず城之内が口をはさんだ。

「ふん、あんなまがいもの、たまたまうまくいっただけに決まってるだろ？ねえ、係長。」

「え？あ、ああ・・・そ、そうかな？」

三沢は窮した。あれは、三沢が書籍を読んだだけで実践したもので、まがいものといわれても言葉を返せなかったのだった。疑問符にするのが関の山だ。

「そもそもゴールも決めずに短期リリースでごまかそうとするとところが僕的にいけない。あんなのはできないプログラマーが小さな部品作りでごまかしているに過ぎないんだ。」

ひどい言われようだが、きちんとしたワークショップでの経験もなく、ただ読みかじった知識だけでやったのがいけなかったのだろう。城之内は鬼の首を取ったかのようにふん

ぞり返り、ホワイトボードの図を指しながら続けて語った。

「その点、このプロセスはいい。あんなできもしないプラクティスを並べるよりも、確実性に富んでいる。そもそもソフトウェア開発とは工学的なものなんだ。システムの仕組みをしっかりと設計して・・・。」

またはじまった。彼の講釈好きには困ったものだ。今日のところはここまでにして、先の策を練ろう。もとより今回の目的はチームの意識を一つにし、次にひかえている案件に向かうための前準備をおこなうためのものなのだ。そのためにも今のプロジェクトをステップにし、スタッフの意識統合につとめ、課長の意のままに左右されないようにしながら部長の政治力にも屈しないチーム、いや、組織を作らなければならない。

“ 敵を欺け ”

“ 人事を尽くせ ”

“ 準備を怠るな ”

三つの言葉を手帳に追記し、水面下での準備をはじめ。

「さとられないようにするのって、意外にむずかしいな・・・。」

三沢はポツリとつぶやいたが、軽く首を振った。

「いや、目的のために頑張るんだ！」

そういつて、つぎの準備に取り掛かるのであった。